

小泉内閣のスローガンは、痛みを伴う構造改革です。政治は国民の痛みを少しでも和らげるためのもので、国民に痛みを強いる開き直ったこの表現がどうして大衆受けしたのか理解に苦しみます。

病気が辛いのは、病気には「痛み」が付きものだからです。最近の研究から、赤ちゃんは大人よりも「痛み」に敏感であることが明らかにされました。新生児集中治療室の保育器にいる小さな未熟児は、気管内挿管され、一日に何回もカテーテルで吸引操作を受けます。張り付いた絆創膏を剥がすときの痛み、採血のための針刺し。そのたびに眠りを覚まされ、たまらず手足を大きくばたつかせて訴えます。この新生児期に体験する『痛み』が、赤ちゃんの脳に刷り込まれ、大きくなっても『痛み』により敏感な子どもに育っていくと言われています。

外来の採血室から、毎朝通路にまで赤ちゃんの大きな泣声が響き渡ってきます。泣きわめいても、麻酔剤の進歩の恩恵を蒙ることなく、ただ無理やりに押さえつけて行ってきたのが子どもへの処置です。

私のいるこども病院では、「痛みのない処置こそ、最高の小児医療」をスローガンに、麻酔科医師を中心に痛み追放作戦を展開しています。マルクやルンバールなどでは積極的に麻酔を導入することにしました。日帰り手術で麻酔の導入時には、オルガンの演奏を聴きながら、また麻酔から醒めるときにも音楽を聴きながらと、手術現場に音楽療法を取り入れ、こどもから手術への不安を取り除く工夫をしています。